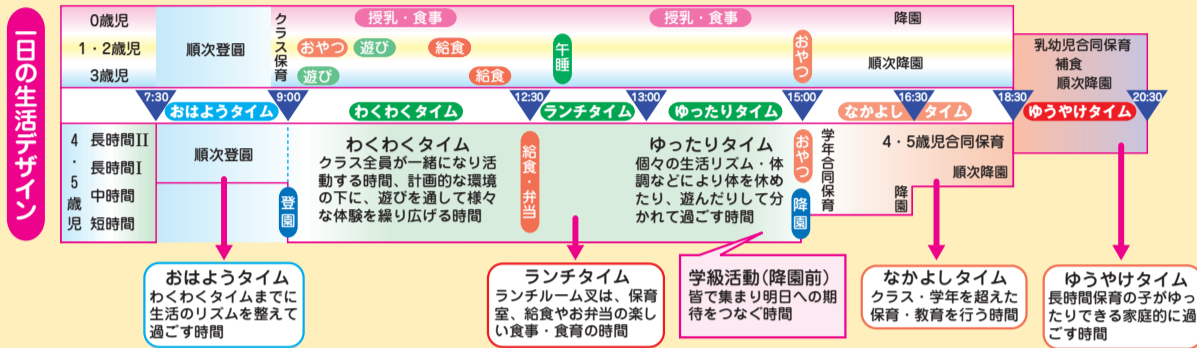


## 四谷子ども園は今

保護者の就労の有無に関わらず、就学前の地域の子どもたちが同じ環境の下で保育・教育を受けられる施設として、今、「認定こども園」が注目されています。新宿区では、平成19年4月に、区内初の認定こども園である四谷子ども園が開園しました。現在、0から5歳児まで161名の園児たちで賑わい、在園児以外の親子のふれあいの場としても重要な役割を担っています。開園から一年半を迎える四谷子ども園のようすをお伝えします。

### 四谷子ども園の一日

四谷子ども園では、7:30~20:30(延長保育時間を含む)の開園時間の中で、0~3歳児については長時間保育、さらに4歳児からは短・中時間保育の子も受け入れ、さまざまな保育・教育時間の子と一緒に活動しています。



### さまざまな生活スタイルの子が共に過ごす中で

朝、早く登園してきた子どもたちは、つどいのへやでゆったり過ごし、9時頃になると担任が迎えに来て、それぞれのクラスに移動します。その後、皆が集まる遊びと遊びの区切りの時間に、担任が一人一人の時間を確認します。「〇〇くんは今日はおやつを食べてから帰るんだよね」。子どもたちもここで、自分と友達の時間を確認し、再び活動に入っていきます。

4歳児から、短時間保育・中時間保育の



新しい子どもたちがたくさん入園してくる子ども園。同じクラスの中で、登園・降園の時間、お昼寝のとり方も違います。「どうして私だけお昼寝するの?」長時間保育の子のこんな質問には、「お昼寝しないと夕方まで元気に皆と遊べないよ」と声をかけてお昼寝するように促します。在園時間の異なる子どもたちが混在するクラスですが、担任は、「子どもにとっては、どの時間も大切な時間であることに変わりはありません。子どもたちに『違い』を感じさせないというよりは、『違い』は『違い』で子どもはそれを自然と受け入れるようになっていくと感じています」。また、4歳児クラスでは「子どもとしっかり向き合うためにもできる限り同じ先生で対応したい」と、幼稚園教諭・保育士が二人でペアを組み、月~土曜日までの間必ずどちらかの担任がいるように工夫し、日々、活動内容を話し合いながら保育・教育を行っています。



## 四谷 園長・副園長に聞きました! 子ども園ストーリー

職員にとっては初めての経験も多く、悩みながらも一歩ずつ積み重ねてきた1年間。そんな四谷子ども園も2年目を向かえ、より充実した保育・教育を提供するために職員一同が日々力を合わせ頑張っています。

**Q** 子ども園は旧四谷第三・第四幼稚園と旧三栄町保育園が統合して誕生しました。はじめは保育園・幼稚園の文化の違いによるご苦労も多かったと聞きますが。



くにしまたかこ 園長

園長: 保育園と幼稚園は、どちらも子どもの健やかな成長を育む場であることに変わりはありません。しかし、施設の役割が異なる以上、保育園では、就労する保護者への負担を最小限に止めることが意識され、幼稚園では、保護者の園活動への積極的な関与を意識するなど、保護者の関わり一つをとっても違いがあり、初めは、なかなか理解し得ない部分もありました。四谷子ども園には、幼稚園教諭、保育士、看護師、栄養士、調理員等のさまざまな職種の人があります。それぞれの特性を活かすことができこそ、子ども園ならではの「保育・教育」の力を発揮できるのだと思います。そのためにも「人を大切にする」これが何よりも大切だと思っています。

副園長: 13時間開所している四谷子ども園では、保育園のような交替勤務制を取りながら、幼稚園のような担任制による教育時間を確保するために、チーム保育という独自の勤務シフトを組んでいます。これまでのそれぞれの働き方を考えれば、職員の戸惑いは当然ありましたが、「ここ

は(幼稚園でも保育園でもなく)子ども園だから、子ども園の仕事しようね」を合言葉に取り組んできました。子ども達は遊びを通して仲間作りをしていますが、職員は仕事を通して仲間になりました。「子ども園」という新しい文化が創られ始めていると感じています。

**Q** 子ども園の良さは何でしょう。

園長: ひとつの例ですが、夏休み明けに久しぶりに友達が登園してきた時のこと。8月も通園していた長時間保育の子どもが「〇〇ちゃん、どうしてなの?」と尋ねます。「おばあちゃんへ行ってたよ」と「ふーん、僕も行ったことあるよ」と言っ一緒に遊びました。「このように、色々な生活スタイルの子が、お互いの違いを受け入れ、認め合う力が自然とつくことが子ども園のよさですね。」

副園長: 一つは、4歳になってからもたくさんの出会いがあることだと思います。0歳から入園している子どもたちは、友達関係が固定化してきたりしますが、子ども園では、4歳から入園する新しいお友達を迎えることで、友達関係が広がり遊びが豊かになるなど、よい刺激になっていると思います。また、保護者の就労状況などが変わっても、子ども達は転園や退園をすることなく、それまでと変わらぬ施設環境で生活することができることも、子ども園の良いところですね。

**Q** 「一時保育」や「つどいのへや」など地域の子育て支援施設として果たす役割も大きいですね。

園長: ここでは、入園する前から子育ての楽しさや大切さを伝えたり、育児の悩みや不安を抱えた保護者が、いきいきと子育てできるように支援したりすることができます。つどいのへやなどを利用して、子ども園の楽しさを知り、お子さんを1歳から入園させた方もいます。専用の部屋、

専属の保育者を配置しているからこそ、子どもや保護者とじっくりと向き合う余裕ができ、その全てを受止めてあげられるのだと思っています。

副園長: つどいのへやを利用している方々は、回数を重ねるにつれて緊張もほぐれ、まるで我が家にいるかのように過ごしています。気軽に訪れ、一人で背負ってしまいがちな子育ての色々な思いを、皆で共有できる場になっていると思います。一時保育についても、利用者の多さを見ると必要な事業だと感じます。

**Q** 最後に、子ども園に対する想いを教えてください。

園長: 子どもたちの自信に満ちた輝く笑顔が見られるように、子ども園に今以上に色々な方が集い、子どもが多くの人とかかわれる場にしたいと思っています。妊婦さんがここで子育てに対する不安や希望を語りあったり、中高生が幼い子どもと接することができたり、あるいは高齢者の方の豊富な経験を活かせたり、地域ぐるみで子育てにかかわれる場、「ミニ地域」が園にできればと思います。

副園長: ここでは職員も、さまざまな職種の人や多くの子ども・保護者と関わることができ、人間関係に一層の広がりがあります。互いの違いや良さに気づき、自分自身を見つめ直し、プラスの力にすることができるところが、ここで働く良さだと思います。子ども園での経験を通して得た、保育・教育のこと、地域への子育て支援のことなどを、他園で働く仲間にも伝えていきたいと思っています。そういった意味で、子ども園が情報発信基地になればと思っています。



せんばくみこ 副園長

一面に続き

# 四谷子ども園特集



## 子育て支援事業 親子の居場所 「つどいのへや」



四谷子ども園では、地域のすべての子育て家庭を支援し、家庭と地域の子育て支援の向上を図ることを目的として、積極的に子育て支援事業を行っています。その事業のひとつ、親子の居場所「つどいのへや」では、「であう」「つながる」「ひろがる」をキーワードに四谷子ども園の遊び場を開放しています。



本日のつどいのへやは外部ボランティアを招いて親子での折り紙遊び。絵本の読み聞かせに夢中な子どもや折り紙をしながら情報交換をする母親など、ここではそれぞれが思い思いの時間を過ごしています。

遊び場の開放以外にも、栄養士による離乳食体験講座や看護師による乳幼児保健講座、歯科医師による子育て歯科講座などの専門家による各種講座や、外部講師を招いてのリズム遊び、コンサートなども行っています。

また、「つどいのへや」の大きな魅力は、離乳食やしつけ、トイレトレーニングなど、子育ての悩みを気軽に相談できるところにあります。「子どもと二人きりであることが多くなると、子育てに不安を

感じることはよくありますが、『つどいのへや』に来て先生からアドバイスを受けて、他の親子と関わったりすると、自分の子育てに自信が持てるようになりますね」と子育て支援担当の中井主任。同年齢の子どもを持つ親たちが、共通の悩みを抱え話し合っていたところに、少し年上の子をもつ親が子育てのアドバイスをすることもあります。1年以上通っている母親は「ずっと二人だけだと息が詰まってしまうことがあります。でもここならば、子どもも安全に遊ばせることができるし、親にとってもいいところですよ」と話してくれました。

「つどいのへや」は、子どもの成長を見て、その場にいるみんなが喜びを分かち合う場になっています。

## 小学校へのスムーズな移行のために ●●四谷小学校と四谷子ども園の連携●●

幼稚園・保育園から小学校への環境の変化にうまく対応できず、児童が落ち着いて授業を受けることができない「小一プロブレム」の対策の一つとして幼保小連携活動の取り組みが全国で広がっています。

四谷小学校では、「わくわくドキドキタイム」として子ども園の5歳児後半と、1年生の1学期の接続カリキュラムを実施しています。ここでは、小学校に入学したての1年生の活動風景を5歳児担当の保育者が観察・記録を行い、感じたことを小学校の先生に伝えるとともに、就学までに必要な力を育てるための手立てにします。子ども園と小学校の段差を少なくし、滑らかな接続が出来るようにとの試みです。

また、今年度からは、0から5歳児クラスまでが各学年との連携活動を計画しており、2年生のさつまいも植えを4歳児が見学し、秋には一緒に収穫して茶巾絞りを作るなどの活動を予定しています。こうした交流の中では、小学生が年下の世話

をすることで思いやりの心を持ったり、園児は小学生に憧れたりといった様子が見られます。

「小学校併設のメリットを活かして、園児と小学生の互恵性をはぐくみ、0歳児から12歳児までの発達を見ていきたいと思えます。それには、小学校・子ども園の先生同士が互いの子どもを知り、連携することが一番大切です」と連携担当の内藤主任は、活動への想いを語ってくれました。



今日は遊びに来てくれた2年生のお兄さんお姉さんに、4歳児の子が子ども園の中をご案内。「ほら、うさぎがいるんだよ！」

## ★★ 学校わくわく情報局 ★★

2学期が始まり、子どもたちの明るい声が学校に戻ってきました。元気な子どもたちの様子をお伝えします。

8月27日(水)、秋の訪れを告げる爽やかな風が吹いたこの日、戸塚第二小学校では、東京都小学校理科教育研究会OBの小尾昭先生、長沼正幸先生を招いて、「風」をテーマに、1年生は「風車をつくり風を感じる」、2年生は「風の力を利用して動くおもちゃをつくる」実験を行いました。



「まずは風を感じてみよう」。1年生は、外に出て紙ふぶきなどを使い風を確認します。教室に戻り、先生が見本の風車をつくる様子を真剣に見入る子どもたち。出来上がった風車を扇風機にあてると、鮮やかな色の大きな羽根が勢よく回転し、思わず歓声があがります。次は教わったおりに、自分の風車を作成。「さあ、風を探しに行ってみよう！」赤



・青・緑、色とりどりの風車を片手に教室を飛び出し、校庭を元気いっぱい走ります。「どっちに向けて走るとたくさん回るかな?」「ここは良く回るよ!」

2年生のクラスでは、平らな板を使っておもちゃの車を動かす実験から。「斜面を急にするほど車は早く遠くに走ったね。次は風の力を利用して動かしてみよう」。

車につける帆のかたち・大きさなどを工夫して、オリジナルの車をつくります。出来上がると、はやる気持ちを抑えきれず、教室のあちらこちらでうちわを仰いで友達の車と対抗レース。「帆は大きくて、カーブがあったほうが風がたまって早いよ」夢中になって遊びながらも、しっかりと観察をしていた子どもたちでした。



8月29日(金)、東戸山小学校で東京アパッチ所属の2名のプロ選手によるバスケットボール教室が開催されました。



今回、指導を受けるのは4年生。挨拶、選手の紹介の後、入念にストレッチ。そしていよいよプロの技を教わってもらいます。まるで手にボールが吸いついているかのようなドリブル、手からボールを離さずそのままゴールに入れるダンクシュート。そのひとつひとつに子どもたちから歓声と拍手が起こります。

「僕もやる!」「私もやる!」選手がやると簡単に見えることもいざやってみるとなかなか難しい様子。ドリブルの練習中、手から離れていってしまうボールを追いかけ、何度もトライする子もいれば、選手に手伝わってもらいダンクシュートの気分を味わう子も。

基礎的なことを習ったら、今度は選手も交じってミニゲーム。2つのチームに分かれ、3分で得点を競います。子どもたちはプロ選手に臆することなくボールを奪いに行きます。そのうちプロ顔負けのプレーをする子どもも出てきて、ゴールを決めハイタッチ。本物の選手と時間を共有し、自分たち自身もプロ選手になりきって楽しんでいるようでした。

東戸山小学校では今年度『本物から学ぶ』をスローガンにそれぞれの分野で活躍されている方をお招きし、子どもたちに生で見て感じてもらう機会を多く持てるよう取り組みを進めています。

